

古典A 大和物語 (第五百十六段) 姨捨① 唱和用

みんなと根を名わせし、本文を認めるものじつもの。

本文	現代語訳
信濃の国に更級しらす所に、	信濃の国に、更級しらす所に、
男住みぢの。	ある男が住んでした。
若しおれに親は死にければ、	若しおれに親が死んでしまったら、
おぼねお親のいふに、	おぼねからし、親のよに、
若しおれおひ添ひしあるに、	若しおれからし、續に聽いしおれたら、
いふ事おし、	いふ事おし、
應おしお多し、	應おしお多し、
いふおおし	いふおおし
かかおしおたねお	腰かおかこしおたねお
おしおしおし、	おしおしおし、
おしお、いふおおの御おし、	おしお、いふおおの御おし、
おおおしおしおし	おおおしおしおしおし
いふおおおし、	いふおおおし、
おしおしおしおし、	(おし) おしおしおし、
おしおしおしおし、	おしおしおしおし、
いふおおおしおしおし、	いふおおおしおしおし、

古典A 大和物語 (第五百十六段) 姨捨② 唱和用

みんなに祖を召わせし、本文を認めるものにしよう。

本文	現代語訳
いのおはせ、	いのおはせ、
うしろにたつちを知らし、	たつちの世を知らし、
二書にたぬたの。	腰が折れ曲がった。
いれをなほ、	いれいよをうしろに、
いのお嫁、所狭からし、	いのお嫁は、邪魔を扱らし、
今昔に死なぬいよを聞かす、	今昔に死なぬいよをうしろに聞かす、
もかゝぬいよを聞かす、	もかゝる口をうしろに聞かす、
「捨らしを知らし、	「捨らし、
疾き日に船に結らしも。」	疾き日に船に結らしを知らし、
うらめを聞かす、	う、うらめを聞かす、
聞かすにわかし、	(暇) 聞かすにわかし、
わかしを聞かすにわかし。	わかしを聞かすにわかしにわかし。

古典A 大和物語（第百五十六段）姨捨③ 唱和用

みんなと祖を名わせて、本文を認めるようにしよう。

本文	現代語訳
月の上も明かき夜、	月が上でも明るく夜、
「婿もか、これ細く。」	「お婿もさん、これ細いことやう。」
昔に誓わねばなる、	昔であなたがたは法殿をたもつてた
取も誓はぬ。」と言ひければ、	お取もし誓はぬ。」と言ひたので、
取のなを誓ひて食はれにけり。	大誓ひで誓食われた。
高き山の麓に住みければ、	高い山の麓に住んでいたので、
その山にはるはる入る人、	その山に奥深く入る人
高き山の峰の、	高い山の峰の
下り来ぐもあはぬに	下りて来られそのあはぬ所に
誓もて逃げて来ぬ。	誓ひて逃げて来てしめた。
「やや。」と言ひて、	(お婿か)「いれいれ」と言ひたけれど、
うらくおせに逃げて、	返事もせず逃げて、
家に来て思ひをるに、	家に帰って来て思ひをるに
言ひ腹立てける折は、	(妻か) 舌を口して腹を立てたので
腹立ちて、	(自分か) 腹を立てて、
かゝつたぞ、	いふものにうたがはしたぞ、
年じつ親のいふ	数年、親のよりに
誓ひつゝあひ添ひにければ、	誓ひつゝあひ添ひにうたがはしたので、
うと誓ひておぼえたり。	うと誓ひて感じた。

古典A 大和物語（第百五十六段）姨捨④ 唱和用

みんなで声を合わせて、本文を詠めるようにしよう。

じの山の上より、	じの山の上から、
月もいと限りなく明かして	月がとっても明るく
出でたるを眺めて、	出たのを眺めて、
夜一夜寝も寝られず、	一晩中、寝るに寝られず、
悲しうおぼえければ、	悲しく感じたので、
かくよみたりける。	じの山に詠んだのだった。
わが心慰めかねつ	私の心は慰めきれない
更級や姨捨山に照る月を見て	更級の姨捨山に照る月を見ると
とよみてなお、	と詠んで、
まだ行きし迎へ持て来にける。	まだ迎えに行つて連れて来たのだった。
それよりのちなむ、	それからのち、
姨捨山といひける。	(じの山を) 姨捨山といつた。
慰めがたしとは、	「姨捨山」といえば「慰めがたし」というのせ、
じれがもじになおあはれる。	じれが由来なのであった。